



全国連第 36 回研究大会岩手大会公開授業資料

『サポーターとしての授業構築の試み』

～「星の王子さま」のグループによる読解を通して～

岩手県盛岡女子高等学校 八重樫哲生

はじめに

サン・テグジュペリ著の「星の王子さま」を三年生の最終教材に選ぶようになって、6年が過ぎた。

十代後半の若い人間たちと関わることの意味はどこにあるのかと自問した時、現時点で考えられることとして、『 ”今ここにはないものを信じられるかどうか ” という問いかけをどのように発信できるのか 』という一点に集約される。問いかけの対象はもちろんその時々々の若い人間たちであるが、究極的には私自身である。

私は日本語を媒介としての生徒との関わりが職務の中心である。… ツモリである。生徒によっては、彼女の人生で学校における授業の最終体験となるかもしれない者も少なくない中、作品がもつメッセージの中心に、そのことが据えられている「星の王子さま」を最後の教材とすることは、意味のあることと考えている。それは、まもなく社会の荒波に飛び込んでいこうとする者のみならず、さらに広く深い知識を必要とする進学希望の生徒も含めてということである。

むろん、授業展開の中身があつてのことだが、生徒の心に迫ることをねらいとして教材を精選する際、授業者がどのような教材価値を見出しているのかはもっと問われていいのではないか。教科書教材を順次こなしていく中でそれが見つかっていくという考え方は、消極的である。教材に対する授業者の思いが強すぎることの弊害にも、しっかりとチェックを入れながら（だからこそ相互研究や研究発表が意味をもつのだが）、より主体的かつ創造的に見つめていく日々の姿勢があつて初めて、精選されるための土俵に作品たちが上ることができるのだと考えたい。それがひいては、偏りの極端ではない形で、しかも独自の考えにたったの教育課程観につながっていき、私が生徒同様、常に受身的に繰り返してきたことへの楔のひとつになっていくのではないかと思う。

#### 教材観 1 わが校の実態について

本校は私立の女子高校で、卒業後の希望は就職四割、進学六割、普通科10クラス、商業科3クラス、家政科4クラス、計17クラス、416名の在籍である。

95年から学年進行で朝読書を導入し、国語科では三年間に九冊の課題図書を独自に選定、配布する。その三年次配当分に「星の王子さま」がある。（夏期休業前後に配布し、朝読書等を利用して全員に読了させて

いる。

教科書とのかかわりでいうと、普通科三年生で履修する現代文（大修館 新現代文）の中に、抜粋の形で収められている。本実践では、この抜粋部分を中心にして指導計画を立て、担当部分のグループ分けも行っているが、その範囲については見当の余地があるかもしれない。また、今年度の実践では、家政科３年生の国語 の扱いの中に、この教材を組み入れた形になっている。（学校における授業の最終体験者の数は、当然のことながら普通科より多い。）

## 教材観 2 教材価値について

ファンタジーとは、空想である。

ファンタジーとは、子どもだけのものではない。

「優れたファンタジーは、何度読み返しても、いつの時代においても、その都度新たな世界を開示してくれるものである。その新たな世界は、実はかつて望んだことのあるものであったり、あるいは漠然と希求しつづけることの輪郭を鮮明にするものであったりする。それは、非現実の世界でありながら、現実を含んだものとなって現前することになる。そうしてこれが子どもにも親しめる形で展開されているのがファンタジーである。この意味で、ファンタジーを読むことは、自己を確認することであり、またその確認は新たな自己を獲得することでもある。」（大修館新現代文指導資料より）

さらにその中の白眉のひとつとされる本作品は、会者定離に縁どられた美の世界であり、出会うことの貴重さと大切なことを共有することのすばらしさ、そして「今ここにはないものを信じきれるかどうか」のあるべきとらえ方をさまざまに考えさせ、体験させてくれるものである。

具体的には、大人と子ども、内側と外側、物質世界と精神世界、孤独と絆、具象と抽象、不易と流行、生きることの意味と時間とのかかわり等、相反する、または比較しうる価値が幾重にも折り重なり、考えれば考えるほど読み手は深みにはまっていく。本作品の普遍的な力を証明するものであるといえる。それを卒業を間近に控えた生徒たちが授業という場を通じて体感し、共有することは、所属感や共感的人間関係をきわめて印象的な形で経験することになるのではないか。

より重要なことは、生徒個々がいかにして主体的に読めるかということであり、そのための一方策を以下に記したい。

## 指導目標

- 1．作品全体の構成を理解し、通底している価値などの探求を通して、ファンタジーの持つ魅力を味わわせる。  
(メタファーやアフォーリズムを実感させる。)
- 2．登場人物の心情をはじめとした言葉と言葉との関わり方や表現の有機的なつながりについて、想像させ発見させる。  
(ブレンストーミング1)
- 3．作品のメッセージや作者のメッセージを自分なりに咀嚼し、それについての独自の考えを持たせ、発表させる。(自分の言葉で表現することの重要性を個々に応じて実感させる。ブレンストーミング2)
- 4．授業を創る、授業に参加するということの意味を考えさせ、他の意見や考えを尊重する姿勢を再確認させる。(授業の主体が自分自身であることを実感させる。)

## 指導形態および留意事項

- 1．教師が黒板を背にし、生徒たちが黒板に向かうという従来 of 形を逆にし、生徒がその授業(予め任された意味段落1つ分)を担当して進行する。(進行は、メインコメンテーターなどと名付けた2名から4名のグループで行うこととする。以下メインコメンテーター=M・C)
- 2．M・Cたちは、予め自分の担当部分を読み込み、ディスカッションして、そこに込められたメッセージなり、全体の構成上の意味なり、言葉相互の関わりなり、登場人物の心情なりを考える。
- 3．M・Cたちは、授業の具体的な進行の仕方についても、ディスカッションの上、これまでの授業経験や前後の担当グループとの関わりなどをもとに考える。(必要に応じて学習プリントや課題プリントなども作成する。)
- 4．一応の時間の目安を一グループ二時限とし、教材提供者(教師)はグループの状況に応じて、適宜アドバイスをしていく。但しそれは決して積極的なものではなく、それぞれのグループの自発性、自主性に任せつつ「待つ」態勢で支援していく。
- 5．実際の授業においては、導入部分として、前時の授業記録を中心としたプリント(別冊参考資料)を必ず準備し、それまでの流れを着実

に想起させる手助けをする。(総時間数は20時間前後で、時間数分の授業通信を発行。できれば翌時間に発行することがポイントであると思う。)これは、なんと少しでも教師がやりきること。

6. それぞれの本時の終結も、原則としてM・Cたちに任せたいが、メリハリや形成的評価の観点からも、適宜教師のサポートが必要であると思われる。

7. 教師はサポーターに徹し、M・Cの進行に関しては、極力口出しをしないようにすること。換言すれば、どれだけ口を出さずに我慢できるかで、その本時の内容の密度や温度が決定されると考えること。(例えばM・Cの発問に対しての反応がなく、無為に時間が経過していると思われるときでも、教師は特有の錯覚に陥ってエゴイスティックな苛立ちを表現しないこと。

8. 一単位時限において、全く授業への参加が見られない生徒がいたとしても、日常のラポールを拠り所として、内省を促す啓発的な周囲のうねりを創る方に心を砕くこと。(Hyden intercouse)

9. 発言者の偏りについては、タイミングを待ちながら、導入時や授業プリントを通じて投げかける。(登場人物のアフォーリズムやメタファー性からも充分啓発できると思われる。)

10. 気持ちの高ぶりが生じても、M・Cから授業を奪わないこと。(耐え難いときもあるが)そのための手だてとしても、授業記録をできるだけ細やかにとること。その代わりに休憩時間や放課後に訪ねてくるM・Cや関係生徒には万難を排してしっかり受け止める。

11. 参考文献等の紹介を適宜行う。

### 授業観(実践のまとめに変えて)

中学での授業経験や本校での授業経験でどうしても不足していると思わざるを得ないことに、生徒個々の参加の状況の客観的把握ということがある。

私は一方通行の授業ばかりしてきた。実技教科であればまだしも、読み、書き、考える力の伸張が目的の1つである日本語の授業で、講義形式に終始することの矛盾や教師としての不遜さを感じながらも、また日々に流されている。

「まず授業規律の確立こそが大切である。授業における精神の解放とか

個の尊重とかは徒に生徒のけじめのなさを助長するだけ...。」

「そんな主観的な？授業が生徒の真の力になるといえるのか？それを評価する基準はどこにあるのか？はっきりと客観的な数字で表れるアチーブメントをこそ重視していく方がどれほど有益だろうか...」

否定しがたい部分もある。だが...

一日6時間×約170日、4単位（国語総合）×約30週×3年間＝360時間に及ぶ授業の営みが彼らをして退屈で理解できず、おまけにつまらない講義の連続であるとしたら...。一番促進されたのはストレスだったという妙な現実を、授業を主たる生計の源としている私はどう考えるべきなのか？

授業とは教材を肴として、あれこれと参加する人間たちでやりとりし、その作品の新しい価値を発見したり、自分の中にある薄汚い？偏見や固定観念を知って驚いたり、彼や彼女の考え方に新鮮な刺激を受けたりする場を積み重ねていくものだと思う。そしてその向こうには、自らの言葉で自らを語ることのできる世界がきっと待っているのではないか。

それを妨げる壁に、自分はなっていないといえるのだろうか？

話を聞き知識を得ることはできても、意志的に授業に参加し、授業を自分たちが創っていくのだという感覚は、現在の高校生にはとても醸成されにくい状況なのかもしれない。

時間が必要である。

合理的に、少しでも多くの知識を伝えようと労を尽くすことにも、むしろ意味がないとは思わない。しかし、永六輔氏によるとそれからは文明は生まれても文化は生まれてこないらしい。自分の中の小宇宙の無限であること、にもかかわらず己に与えられた時間は有限であることを静かに認識できるようでありたい。だからこそ文明にのみ流されず、文化を担い、創ろうとあがき続ける人間でありたいとも思う。それは、個としてであるが、同時に“他とともに”とも一致させなければならない。日本語の授業はその両者のための基本的なトレーニングの場になり得ているのか。なり得ないのか。

自分の考えや思いを、ある作品や文章をもとにして、読み、書き、話し、聞き、また読み、考え、書き、話していく。そういう授業の重要性を思う。そして、日本語（母国語）の使命として、機械や電磁波ではな

く、生身の人間同士の信頼関係の構築を拠り所にしながら、授業を考えていくことの必要性を改めて確認できている気はする。

作品の中でキツネはいう。“言葉ってもんが勘違いのもとだよ...辛抱が大事なのだ... ”自分なりの課題を、『辛抱しつつ、自己満足に終わらせない形で、実践の記録と積み重ねをしていくこと』とおさえ、アンケート、メール等ご指導、ご助言のほど、お願い致します。

盛岡女子高等学校

〒020-0114

盛岡市高松一丁目21番14号

019-661-3633

fax 019-663-0819

E-mail [seiyo@rnac.ne.jp](mailto:seiyo@rnac.ne.jp)

八重樫 哲生